

PLAYGROUND

明楽和記

2019年6月14日[金] __ 30日[日] 11時 __ 19時

[金]のみ11時__20時 / [月]休廊

【協力】内田工業株式会社、北川鉄工所

Gallery **P A R C**
GRAND MARBLE

TEXT [Gallery PARC]

『色を置くこと、与えることで作品を成立させる。』とする明楽和記(あきらかずき / 1988年・和歌山生まれ)は、絵画を「ある場に色が置かれている状態」と解釈しています。この「ある場」とはいわば「支持体」であり、それはキャンパスや壁、窓や地面などを含みます。そして「色」は絵の具や塗料によるものだけでなく、私たちの目に馴染んだ既製品(付箋、風船や電球、ビー玉やスーパーボールなど)などをも含んでいます。文字盤が塗装された時計、床にドリッピングされた大量のビー玉、部屋を跳ね回りながら空間にストロークを描くスーパーボール、ギャラリー空間を強引に白色で塗り込めてつくられた無の象徴(ホワイトキューブ)。

明楽のこうした作品は「絵画」を解釈・分解するとともに、場の性質を見極め、そこに抽出した要素(色・支持体・行為・意味・機能)を再配置する行為であり、明楽にとっての絵画制作であるといえます。また、それらは時にズラされ、異なる規則によって並び替えられ、置き換えられて配置されることで、鑑賞者に認識のズレを意識させるとともに「本来それが何故・どうしてそうなのか」といった疑問への気づきを促します。

本展「Playground(遊び場)」は、PARCを「公園」と置き替え、展示空間と公園などの差を排除してみることで『作品』の在り方や成立条件を考察します。建築を絵画に、彫刻を絵画に、溶けていくアイスストロークを絵画に。明楽はこれらを観念的な思考実験としてではなく、鑑賞者が思考や視覚、あるいは「想像してみること」によって関わることでより楽しむことのできる、ユニークな作品として提示しています。また、本展ではその思考を絵画だけでなく彫刻へと拡げ、遊具を彫刻として展示空間に持ち込むことで、その同一性や固有性へと思考を向けながら、やはり視覚的な楽しさを作品の中心に据えています。

絵画を軸に、それぞれの境界や関係性へと眼差しを向ける明楽は、本展では『猫』をモチーフとした絵画・彫刻作品を各階に点在させています。それもまた同一性や差異への観察の眼差しを出発点に、想像してやることの楽しさを鑑賞者に促しています。それはまさしく猫のように、少しぶっきらぼうに、けれどもしつこく求めてきます。各フロアあるいは空間の端々に点在する作品と出会った際には、それらに眼差しを向け、想像により愛でることで、より作品をお楽しみいただけるのではないのでしょうか。

WORKS LIST

- [2F] **変形絵画** 2019 木、釘、絵画
- 色窓** 2015 インクジェットプリント
- [3F] **Melting Painting** 2019 アイススクリーム、キャンパス
* 本作品には鑑賞者の皆様に有料にて関わっていただけます。
詳しくは2Fカウンターにてスタッフにお尋ねください。
- [4F] **sculpture** 2019 塗料、鉄
- [1F~4F] **Light & Soft** 2019 ミクストメディア
- 1F 「meow」
- 2F 「mew」 「miaou」 「miau」 「miau」
- 3F 「miao」 「myau」
- 4F 「miao」 「yaong」 「mijav」

STATEMENT [明楽和記]

「遊具を彫刻に、猫を絵画に。」

魔法のようですが、これらの異なるものを地続きにしようと試みたとき、頭の中にそれぞれの領域を隔てる壁があるかもしれません。

しかし、その壁を乗り越える、もしくは消し去ることができれば、公園にはカラフルな彫刻が並び、向こうの方で絵画が寝ている、何気ない日常の中に作品のある場が広がることになります。

今回の個展は公園と遊具をテーマに展覧会を構成し、その壁を乗り越えるハシゴ、もしくは壁を壊すドリルのような作品を中心に展示します。

CV

- 1988 和歌山生まれ
- 2011 成安造形大学 構造表現クラス卒業
- 2012 成安造形大学 今井祝雄研究室修了

個展

- 2012 Touch & Stroke (KUNST ARZT・京都)
- 2013 farbraum (weissraum Kyoto・京都)
 - .. Double Walking (CASE・京都)
 - .. 16LB (Gallery Ort Project・京都)
- 2015 絵画の描き方 (Gallery 1963・大阪)
 - .. 白 (Gallery PARC・京都)
 - .. composition (大津市北小松・滋賀)
- 2016 明楽和記展 (CAS・大阪)
 - .. 60 (GALERIE ASHIYA SHULE・兵庫)
- 2018 AKIRA (Gallery Ami-Kanoko・大阪)

グループ展

- 2018 ゆき (Gallery Ami-Kanoko・大阪)
 - .. KAVC アートジャック (神戸アートビレッジセンター・兵庫)
- 2017 Marcel Duchamp に (CAS・大阪)
- 2016 赤 (CAS・大阪)
 - .. 六甲ミーツ・アート 2016 (六甲山・兵庫)
- 2014 ART COURT FRONTIER #12 (ART COURT Gallery・大阪)
- 2013 Art Shower 2013 (海岸通りギャラリー CASO・大阪)
 - .. アート亀山 2013 (亀山市内・三重)
 - .. 秋の小旅行 (窯横カフェ・愛知)
- 2012 成安造形大学卒業制作展 (京都市美術館)
 - .. Art Shower 2012 (海岸通りギャラリー CASO・大阪)

受賞歴

- 2011 成安造形大学卒業制作展「最優秀賞」(京都市美術館・京都)
- 2012 ターナーアワード 2012「入選」(全国に巡回)

企画・キュレーション

- 2009 湖族の郷アートプロジェクト (企画・運営・代表)
- 2012 春名祐麻展 (キュレーション)

ワークショップ

- 2009 101dogs (京都市勧業館 みやこめっせ)
- 2011 13 painters (仰木の里東保育園・滋賀)

パフォーマンス

- 2011 ナカノシマ 現代美術の流れ (堂島川・大阪)
 - * The PLAY のメンバーと参加

コレクション

- 2012 An Infinite Stroke (Super Ball) (東川町・北海道)
- 2016 painting of three colors (Hair & Facial U・和歌山)

PLAYGROUND

明楽和記

TEXT [明楽和記]

動物の立体物、運動場、アイス、鉄の遊具、そして猫。
展覧会は公園、遊具をテーマに構成しています。

色窓 [2F]

滋賀県大津市にある建物の窓に内側から色画用紙をはり、それを撮影した作品。制作している様子は、国道から眺めることができました。

大津市と高島市の境の近く、琵琶湖沿いの国道のすぐ横にこの建物があります。体育館や、支所などいくつかの機能を備えているため、複雑な構造を持った建物なのですが、グラウンドに接している面だけ、シンプルで正面性が強くなっています。そこにいくつかの窓があり、構図が決まっていたので、窓に色を置くことで絵画として成り立つ、と考えました。2014年にARTCOURT Galleryで角材を並べ、ギャラリーの建築も含めて絵画の構造を持たせた作品を展示し、2015年にGallery PARCで白壁を建て、ホワイトキューブ化しました。この時期、建築を作品に取り組みむことに関心があり、この作品も最小限のアプローチで正面性を強調することで、建物を絵画化しています。

変形絵画 [2F]

絵画と木材を組み合わせて創った立体。絵画は知り合いや、近所の大学、リサイクルショップでもらったりして集め、木材は過去作品のは材や、ごみ捨て場から拾ってきたパネルなどを主に用いています。

2016年のCASでの個展で、僕はアーティストとして行きつづりました。それまで絵画を拡大解釈し、なにか対象に色を置くことで作品を制作してきましたが、CASで展示した作品は「ギャラリー(作品を設置する場)に(他者の)作品を色として展示する」というもので、展覧会に置くものは、作品が最もふさわしく、今後、自分のしていることは展開のしようがないと感じました。そこから自分の土台自体を見直し、再編し、変えていこうと動きはじめ、来年に開催される僕の個展で、切り替える予定ですが、今回の個展はその狭間の時期にあります。その中で、彫刻を創ったり、筆と絵具を使って絵を描いたり、今まであまりしてこなかったことも実験的に展覧会に加えています。

変形絵画は「どうしても創りたい」という自身の中にある強い衝動があり、ほとんど理屈抜きで、形にしていきました。僕は中学生くらいから吐き出すように、紙に強い筆圧で絵を描くことがあったのですが、大学に入ってからは、アートを学び作品から、感情的な部分や衝動性は無くなっていきました。コンセプトや、コンテクストを理解し、作品に取り込んでいくことで、ある意味、アーティストとして整ってきましたが、自分の核となる部分を、この狭間にいる時期に一度、形にする必要があったのかもしれない。

Melting Painting [3F]

キャンバスの上にアイスをのせ、描く絵画。四色の壁面、そして六色のアイスが用意されており、鑑賞者はチケットを購入することで、その両方から自分の望む色を選び、アイスをのせることができます。

これまでに、色のついたシャボン玉をギャラリー内に発生させ、それがどこかに触れてはじける(色は徐々に消える)ことで、タッチ(筆跡)を現象として作品化し、高速で跳ね続けるスーパーボールの軌跡から、ストローク(筆跡)を現象として作品化しました。このように絵画を一時的に色がある状態と解釈した作品をいくつか創ってきました。このMelting Paintingはアイスが溶けることで、抽象的なイメージが描き続けられます。完成する時点はなく、抽象絵画を現象として作品化しています。

sculpture [4F]

遊具を彫刻化した作品。既成の遊具の設計図を企業から入手し、形や大きさ、素材をそれと同じもので指定して、鉄工所へ発注しました。作品のほとんどの形は、はん登棒(登り棒)で、鉄パイプ7本が地面から垂直に立っており、上が閉じていて、そして下が地面に突き刺さった構造になっているのですが、この作品ではそれを横に向けて、地面と接している面を無くすことで、左右それぞれの面が閉じた形になっています。

2015年、PARCでの個展「白」は、ギャラリーをホワイトキューブ化するシンプルな作品です。移転する前のPARCは、巨大なガラスや、むき出しのコンクリートで構成された重厚な空間で、なぜか畳の台が設置されていたりして、非常に独特で、ニュートラルな空間とはほど遠いギャラリーであったため、ホワイトキューブにしてしまうことで、場所の特性を逆説的に、強調できるのではないかと考えました。その一方で、「白」と同じ着眼点で、PARCの重厚な空間に置く作品は、どのようなものがふさわしいのかを導き出した展覧会プランも考案し、開催が決定しました。プランの内容は、無塗装の公園の遊具を彫刻として設置する、というもので、遊具は鉄のような重厚な素材で作られていても、過度な着色の効果で、その素材感は消し去られていますが、無塗装のまま彫刻台にのせて展示することで形は見慣れた遊具であっても、鉄や樹脂でできたむき出しの素材感から、全く印象の異なる立体物に仕上がりに、PARCの空間に合うと考えました。展覧会の開催が決定し、展示する遊具を提供してくれる業者を探し、交渉し、見つけることができましたが、そうこうしているうちにPARCは移転が決まり、現在の場所になりました。その移転があったため、場所と関係が強くあった作品プランがいったん概念化し、新たな場所で着地しました。

遊具の写真を撮り溜めていて、PC上でまとめて表示されたとき、ベッヒャー夫妻の写真作品に似ていると感じました。撮った写真は、被写体の角度もばらばらで不ぞろいですが、同じ用途の鉄の立体物を撮り集めたという点が共通していました。そして、遊具には特有の造形性と、素材やその着色から彫刻と共有している要素を見出し、少し形を変えて本来の機能を無くし、鑑賞物として展示することで、それらを強調しました。

Light & Soft 軽くて、やわらかい [1F~4F]

「猫が絵画に見える」現象を共有するため、いくつかの作品を制作しました。キャンバスに撮影した猫の柄をプリントし、その上からシンプルな模様を絵具で描いた絵画と、キャンバスや立体物へ猫の柄を絵具と筆を使い写した絵画があります。

いつからいるのかわからないくらい、当たり前のように膝の上にいて、なぜかは分からないけれどこちらを見つめていたり、朝起きたら同じ布団で寝ていたり、まるで空気のように生活に溶け込んでいます。そんな感じで、僕の頭にもスッと入ってきて、自然と何気なく居座っているところが猫らしくて、この作品を気に入っています。アトリエで絵画について考えたり、調べたりしているうちに(こうしているときも私の膝の上にいて)、絵画と猫が同じものであるという結びつきが生まれました。両方とも、構造体を持ち、軽く無害であり、町の中にいる猫はどこか目立つ存在ではありますが、それはささやかなもので、部屋の壁にかけている小さめの絵画に近い存在感を持ちます。

猫の柄は目立つことが多く、どこかユニークです。もともと、今でいうキジトラに近いもので、そこから、猫が人間の社会に入り込み、暮らす中で、柄の本来持っている機能は不要となり、多種多様な模様が生まれてきました。現在ではブチ、シロ、サバ、クロ、ミケ、茶、トラ、ブチトラ、茶シロ、灰、などがあり、そこから派生した柄があって、更に個体によって微妙に異なるので、無限に模様があります。

猫の模様を筆と絵具を使って、写しているときに気づいたのは、その色と形が異様に複雑であるということです。たとえ黒猫であっても、よく見ると毛の奥の方に赤っぽい色があったり、青く見える場所があったりします。今回、展示している作品で、絵具でキャンバスに描いたものはその形と色の複雑さを表現しています。絵画に置き換えることで、その異様さが出るのですが、この絵画を元にした猫の写真の、写し取った部分に当てはめても、ほとんど違和感はありません。

猫は一匹一匹が独自の柄をもっていて、鑑賞物としての魅力もあるため、歩く抽象画といえるかもしれません。街中や、どこかで猫を見かけたとき、「猫→絵画」という意識を持つことができれば、作品のある場が一気に広がることとなります。